

No.06「古典」×「数学」

【授業者】山本玄（国語科），中村清寛（数学科）

【対 象】普通科3年生（文系選択生）

【日 時】令和8年6月18日（木）

【テーマ】古典作品の感情分析を活用して教科横断型の作問に取り組もう

【内 容】

目的

本授業は、文系・理系の枠組みを超えた「クロスカリキュラム（教科横断型）」の視点を取り入れ、2025年以降の大学入学共通テスト国語（大問3・実用的な文章や図表・グラフを伴う読解）の新傾向に対応できる多角的な思考力を身につける契機とすることを目的とする。具体的には、『蜻蛉日記』における登場人物（女（藤原道綱母）・藤原兼家）の感情を数値・グラフに置き換えて分析し、それを用いて生徒自身が「図表を用いた国語の読解問題」を作問した。



授業の流れ

本授業は、個人ワーク、グループワーク、および数学的アプローチを組み合わせた以下の手順で進行した。

1. **テキストの読解と感情値の数値化（個人ワーク）** 『蜻蛉日記』の6つの場面（資料1～6）を精読し、道綱母の目線における「正（プラス）の感情値」と「負（マイナス）の感情値」を生徒個々人が判断してワークシートの表に割り振る（数値化する）。
2. **統計処理とグラフ化（グループワーク）** 班ごとに各資料の感情値の「平均値」を算出する。「正の感情値」「負の感情値」「感情値の和」の3つのデータを導き出し、これら3つの推移を折れ線グラフとして表現する。
3. **グラフを用いた国語問題の作問（協働学習）** 完成した「感情曲線グラフ」をデータとして活用し、「グラフの数値（感情の起伏）が変化している根拠を、古典本文の文脈や表現から探す」という形式の選択肢問題を生徒同士で作成・共有する。

成果

- ・ 古典の心情読解において、数理的な「グラフ化」という過程を設けたことにより、兼家と道綱母の愛憎が視覚的に可視化された。
- ・ 単に問題を解く側ではなく、「自ら図表入りの問題を作る」というメタ的な視点に立つことで、本文の記述と視覚データの整合性を丁寧に確認することができた。

課題

- ・ 感情値の数値化における基準の曖昧さ

「正・負の感情」をどの程度の数値で表現すべきか、初期の個人ワークにおいて評価基準にばらつきが生じた。それが今回の言語活動の面白さでもあるが、もう少し、あらかじめ

「死にたいほどの絶望＝負の最大値」などのアンカー（基準）を明確に共有しておくべきだった。